

(3) 中心課題に、より具体的な副課題をつける。副課題の候補として、木炭生産・木工等小規模家内工業、きのこ・薬草等高価値作物の生産技術、省力的・効率的造林・耕作技術、アグロフォレストリーの実際、技術・考え方の普及方法、等が考えられる。

(4) カリキュラムを、副課題にそくした講義 25%、実習を含む地域研究 55% およびプロジェクトの見学 20% とし、レポートの作成、討論はそのつど行う。

(5) 実施時期は副課題を配慮し、植物をあつかう場合は雨期にまたがるようにする。実施期間は現状通りとする。

おわりに

第三国研修に参加し、日本国内で行われている研修、特に集団研修を外国から眺める機会が得られたことは、大変有益であった。日本国内の研修を考えてみると、研修の中には外国で行った方が利点が多いものもあるように思える。林業試験場、育種場など受け入れ機関で研修の時間配分に苦慮している現状を見ると、ますますその感を深めている。そこで一つの考え方として、熱帯という場所で行った方が適切であると考えられる今回のような課題で行う研修については、積極的にこの方式を使うことを提案したい。しかし、日本のすぐれた技術を習得するような研修については従来通りの方式で行う必要はあろう。これらの点については読者のお考えをぜひ伺いたいものである。いずれにせよ JICA 研修は、研修生の母国の技術・知識をいかに上げるかということが基本となることは理の当然であり、もし見直しをするにしてもこの基本線は堅持すべきであると考えられる。

新刊紹介

◎東南アジアの熱帯多雨林 (RUBELI, K.: Tropical Rain Forest in Southeast Asia-A Pictorial Journey-Tropical Press, Sdn. Bhd., Kuala Lumpur, pp. 234, 1986 55 M\$ 邦価 約 3,500 円)

森に入る・石灰岩台地と洞穴・山岳林・多雨林に暮す人々の4つの章に分けられているが、主に半島マレーシア、南タイ、東マレーシア(サバ)、北スマトラの国立公園で撮した熱帯多雨林の景観、とくにその中の奇妙な、またカラフルな樹木・草本、キノコ、地衣、そしてけものや昆虫などの写真集。一枚一枚の写真のできればは、すばらしいカラー印刷になれた私たちには、もう一つの感じである。著者はオーストラリア人で、1974年以来 MARA Institute of Technology で講師をし、1980年以降はフリーランサーとして写真撮影と執筆活動をつづけているとのことだが、長年の滞在の中に、さすがにいいシャッターチャンスにめぐまれている。トリトリグモの子どもが巣から広がるどころなど、一見に値する。みて楽しめる著書である。

(渡辺弘之)